



『古今和歌六帖』出典未詳歌注积稿：第六帖(12) 蝉～鈴虫

著者	福田 智子
雑誌名	文化情報学
巻	11
号	1
ページ	75-63
発行年	2015-11-05
権利	同志社大学文化情報学会
URL	http://doi.org/10.14988/pa.2017.0000014578

研究ノート

『古今和歌六帖』 出典未詳歌注釈稿―第六帖(12) 蟬／鈴虫―

福田 智子

『古今和歌六帖』は、約四千五百首の歌を、二十五項目、五百十七題に分類した類題和歌集である。収載歌には、『万葉集』『古今集』『後撰集』など、出典の明らかな歌もある一方、現在では出典未詳と言わざるを得ない歌もある。本稿では、「蟬」から「鈴虫」までの題に配されている出典未詳歌、九首について注釈を施す。

凡例

- 一、本稿は、『古今和歌六帖』所載の和歌について、考証の結果、出典の見出せなかつた歌について注釈を加えるものである。本稿では九首を収めた。
 - 永青文庫蔵北岡文庫本 略称(永)
 - 島原図書館蔵肥前嶋原松平文庫本 略称(松)
 - 内閣文庫蔵和学講談所旧蔵本 略称(和)
 - 内閣文庫蔵林羅山旧蔵本 略称(羅)
 - 神宮文庫蔵林崎文庫旧蔵本 略称(林)
 - 神宮文庫蔵宮崎文庫旧蔵本 略称(宮)
 - 田林義信氏旧蔵本 略称(田)
 - ノートルダム清心女子大学図書館蔵黒川本 略称(黒)
 - 寛文九年版本 略称(寛)
- 二、歌番号は、『新編国歌大観』の通し番号を用い、歌題を()を付して記す。
- 三、底本は、『新編国歌大観』と同じく、宮内庁書陵部蔵桂宮本とする。
- 四、本文は、歴史的仮名遣いに統一する。踊り字を解消して当該の文字に改め、底本の表記を()に入れて傍記する。また、私見によって濁点を付す。さらに、送り仮名など、底本にない文字を補った場合には、本文の右に「・」を付す。ただし、漢字仮名の区別は底本のままとする。
- 五、校異は、漢字・仮名の表記の違いや仮名遣いの相違は示さず、語の異なりのみを示す。諸本とその略称は次のとおりである。

なお、諸本本文は、主として国文学研究資料館所蔵のマイクロ・紙焼き資料に拠ったが、次の三本については個々の資料に拠った。

(永) 細川家永青文庫叢刊3 『古今和調六帖(下)』(汲古書院、昭和五十八年一月) 所収の影印

(松) 島原図書館蔵肥前島原松平文庫所蔵の原本および紙焼き資料(寛) 架蔵本

六、他出には、『古今和歌六帖』からの引用と思われる歌について、歌集の名称(『新編国歌大観』の目次に拠る)、巻数、部立、歌番号、歌題、詞書、作者名、歌本文、左注を順に示す。

七、考察中の和歌の引用は、とくに断らない限り、『新編国歌大観』に拠る。引用形式は、原則として、「和歌本文」(歌集名・部立・歌番号・作者名・詞書)とする。『万葉集』の番号は、新・旧の順で表記し、本文には適宜漢字を当てる。なお、必要に応じて、歌集名に底本の名称を冠することもある。

八、巻末には、蟬々鈴虫題の歌(三九七二〜四〇〇一番)の別出歌一覧を付す。

注 釈

三九七二(せみ)

【本文】

秋はやみせみの鳴きつ(こ)つなげかれぬつれなき人のすむ山とほみ

【校異】○せみの鳴つ、一蟬(な)のきつ(な)、(宮)

そせい

【語釈】○秋はやみ 漢語「早秋」(秋の初め。陰曆七月。)に拠る表現。

【考察】参照。「秋」は「飽き」との掛詞。「飽き早み」で、恋人に早くも飽きられてしまった意を掛ける。「はやみ」の「み」はミ語法。○鳴きつつ「鳴き」は「泣き」を掛け、蟬と作者とを重ねる。○なげかれぬ「れ」は自発。○つれなき人のすむ山とほみ「つれなき人」は、私にづらい思いをさせる人。私に冷淡な人。「つれなし」は、人の心をくもつとしないさまをいう。「とほみ」の「み」は、初句と同じくミ語法。当該歌は、一首の中にミ語法が二度用いられている。

【通釈】秋が早いので、蟬が泣くように私も泣きながらつい嘆いてしまふ。早くも私に飽きてしまった冷淡なあの人が住んでいる山が遠いので。

【他出】なし

【考察】

季節が早秋であるのを嘆くかのように鳴く蟬に、恋人から早くも飽きられてしまった自身を重ね、遠くに住む恋人を思つて嘆く歌である。当該歌の上句の表現と発想は、「梁蕭子雲落日郡西齋望海山詩曰。漁舟暮出浦。漢女採蓮帰。夕雲向山合。水鳥望田飛。蟬鳴早秋至。蕙草無芳菲。故隱天山北。夢想日依依。」(『芸文類聚』第二十八卷人部十二、遊覽)に見える「早秋」の「蟬」に依拠するところが大きいだろう。

初句「秋はや(み)」は、和歌の用例が他に管見に入らないことから、漢語「早秋」を訓読した稀少な例と考えられる。「早秋」という語は、前掲『芸文類聚』の他、『懷風藻』所載の漢詩をはじめ、『古今六帖』『和漢朗詠集』の題にも見出すことができる。「飽き早み」と掛けるという意図のもとに生まれた和歌表現と見られよう。

秋の蟬の声は、「秋のせみさむき声にぞきこゆなる木のはの衣を風や

ぬぎつる」(寛平御時后宮歌合・一一二・左)というように、季節外れの寒々しさが感じられる。また、「世中をなにしたとへむかせさむみくれゆくあきのうつせみのこゑ」(能宣集・二四七・よのなかのつねなきをみて、万葉集のなかなる沙弥満誓が歌をもとにて、しものくをくはへて、したがふ、時文などしてよみはべりし)では、世の無常の喩えに用いられている。

「なげかれぬ」の例は『古今集』に見られ、つらい世の中を詠んだ「しかりとてそむかれなくに事しあればまづなげかれぬあなう世中」(雑下・九三六・小野たかむらの朝臣・題しらず)の他、「……しろたへの衣のそでに おくつゆの けなばけぬべく おもへども なほなげかれぬはるがすみ よそにも人に あはむとおもへば」(雑下・一〇〇一・よみ人しらず・題しらず)では、恋人に逢えないことを嘆く。恋心を詠んだという点で、当該歌は後者の例に通じる。

「つれなき人」の勅撰集における初出は『古今集』で四首あり、続いて『後撰集』に三首、『拾遺集』に五首見られる。八代集中、『新古今集』のみ用例がない。『古今六帖』が当該歌の作者とする素性の歌としては、「忘草なにをかたねと思ひしはつれなき人の心なりけり」(古今集・恋五・八〇二・寛平御時御屏風に歌かかせ給ひける時、よみてかきける)が挙げられる。

「山とほみ」の例は、同じ『古今六帖』に「はつせめとおもひたつたの山とほみこまにとどめてをるすべもなし」(第二・一四三四・てら)があるものの、用例は少ないが、当該歌も、この六帖歌同様の「すべなし」という状況を詠んでいるものであろう。

三九七六(せみ)

【本文】

今も猶われてぞ人のうらめしきかるさなかの中になかれて

【校異】 ○うらめしき―うらめしき本ノマ、(羅) ○かるさなかの―本ノマ、かるさなかの(寛)

【語釈】 ○われて 心が割れ砕けるほど激しく。また、(恋人と)別れての意を掛ける。 ○うらめしき 「うらめし」は、期待に反した相手の心や行為について、自分の力ではどうすることもできない状況に対する不満や嘆きが心中にわだかまり、いつか心を晴らしたいという気持ちをいう。 ○かるさなかの 未詳。以下、本文に乱れがある。「考察」参照。

○中になかれて 蟬題であることから推すと、「なかれて」は、「鳴かれて」「泣かれて」の掛詞である可能性が高からう。「れ」は自発。

【通釈】 恋人と別れた今でもやはり、激しくあの人を恨みに思うよ。(以下、未詳。)

【他出】 なし

【考察】

下句本文が乱れており、一首の意味が解せない。『考證古今歌六帖』(石塚龍麿稿、田林義信編、有精堂、昭和五十九年四月)は、「○未考(此歌心得かたし。こゝにいれることもいかゞ。蟬の歌とはきこえず。二句点筆者)と記す。確かに、「せみ」あるいは「うつせみ」の語が見当たらないのは不審である。本来は下句に詠まれていたか。ただし、下句は諸本同一であり、現存伝本のごく早い書写段階からの乱れであると推察される。

初句「今も猶」は、「はるがすみたちにしものをいまもなほよしの

やまにゆきのみぞふる」(躬恒集・三〇九)、「むかしみしわがふるさとはいまもなほうのはなのみぞめにはみえける」(躬恒集・四四四)、「そほづたつ山田のいけはいまもなほ心ふかしなうきせはあれど」(古今六帖・第二・一一三三・そほづ)といった用例からも知れるように、以前と変わらぬ現在の状況や心の状態をいい、当該歌では、第二句・第三句の「われてぞ人のうらめしき」という心情を指す。

「われて」は、「よひのまにいでていりぬるみか月のわれて物思ふころにもあるかな」(古今集・雑体・一〇五九・よみ人しらず・題しらず)、「いとどしくもえこそわたれ石ばしのなかよりわれて出づるおもひは」(小馬命婦集・四三・いしばしにすむをとこ、久敷くきこえねばとて)という歌からもわかるように、通常は、心が碎けるほど激しい心情を、「みか月」や「石ばし」などとともて技巧的に詠むことが多い。当該歌にも、下句にそれに相当する語があったか。なお、『百人一首』にも採られた「せをはやみいはにせかるるたきがはのわれてもすゑにあはむとぞ思ふ」(詞花集・恋上・二二九・新院御製・題不知)に照らして、当該歌も、「(恋人に)別れて」の意を掛けたと見た。

なお、人に対する「うらめし」という心情を詠んだ歌には、「うらめしき君がかきねの卯花はうしと見つとも猶たのむかな」(後撰集・夏・一五一・ものいひかはし侍りける人のつれなく侍りければ、その家のかきねの卯花ををりていひいれて侍りける)、「かくれぬのその心ぞうらめしきいかにせよとてつれなかるらん」(拾遺集・恋二・七五八・一条撰政・侍従に侍りける時、むらかみの先帝の御めのとに、しのびて物ののたうびけるにつきなき事なりとて、さらにあはず侍りければ)、「命だに心なりせば人つらく人うらめしきよにへましやは」(和泉式部続集・

一七二・ひとりごと) 他がある。

三九八五(夏むし)

【本文】

もゆる火に思ひ入りにし夏むしはなにしかさらにとびかへるべき

【校異】 ○夏むしは―夏虫の(宮)

【語釈】 ○思ひ入りにし「思ひ入る」は、思いつつ中に入る意と、一途に思い詰める意を掛ける。「思ひ」の「ひ」に「火」を掛けることが多いが、

ここでは初句「もゆる火に」の「火」を同音で響かせる。 ○夏むし

夏の夜、灯火に寄ってくる虫。 ○なにしか 副詞「なに」に、副助詞

「し」、係助詞「か」が付いたもの。理由や目的が不明であることを指示

する。どうして。なぜ。 ○とびかへるべき 「とびかへる」は、飛んで元の場所へ立ち戻る意。

【通釈】 燃える火だと思いつつ、一途に思い詰めて飛び込む夏虫は、ど

うして今さら元の場所に戻って来られるだろうか。いや、戻ることはいだらう。

【他出】 『和歌童蒙抄』第九、虫部、八三三番

虫

もゆるひにおもひりにしなつむしはなににかさらにとびかへるべき

【考察】

灯火に向かって一心に飛び込む夏の虫は、身を焼き滅ぼして、再び戻って来ることはない。そのような夏のありふれた情景に、人の世の無常を見出した歌であろう。

「夏むし」の勅撰集における初出は『古今集』(三首)であるが、『後

撰集』に四首採られたのが最多である。「夏虫の身をいたづらになすこともひとつ思ひによりてなりけり」(古今集・恋一・五四四・読人しらず・題しらず)、「夏虫をなにかいひけむ心から我も思ひにもえぬべらなり」(古今集・恋二・六〇〇・みつね・題しらず)、「夏虫の身をたきすて玉しあらば我とまねばむ人めもる身ぞ」(後撰集・夏・二二三・よみ人も・題しらず)、「夏虫のしるる迷ふおもひをばこりぬかなしとたれかみざらん」(後撰集・恋五・九六八・伊勢・返し)というように、夏部の歌もあるが、圧倒的に恋部の歌が多い。灯火に飛び込んでいく夏虫に、恋に身を焦がす人のさまを重ねるのである。ここで特筆すべきは、「なつむしのこひ」という歌題で行われた『陽成院歌合』(延喜十二年夏)で、「みのならむことをばしらでなつむしのいかなるこひにおもひいるらむ」(一四・右)など、二十首の和歌が詠まれている。『新編国歌大観』解題(藤岡忠美氏)に拠れば、この歌題は特異なもので、前掲『古今集』五四四番歌を典拠とするものであろうという。古今・後撰時代に夏虫が歌語として定着する上で、この歌合の存在は看過できないであろう。

なお、「もゆる火」と「夏むし」との組み合わせには、「もゆるひのながきちぎりをなつむしのいかにせしかは身にはかふらん」(能宣集・二六八・なつむし)があり、当該歌と表現上の類似性が認められる。この能宣歌は、一連の歌合中の一首であるが、『平安朝歌合大成』(萩谷朴氏、同朋舎出版、一九九五年五月)では、「六七 某年 或所歌合」として掲出され、安和二年(九九九)前後の成立かと推定されている。あるいは、当該歌も同一文化圏における詠作か。

能宣歌との緊密なつながりは、第四句の検討からも窺える。「なにしかさらに」という表現は、『新編国歌大観』を検しても他に用例はない。

だが、「他出」に掲出した『和歌童蒙抄』の本文「なににかさらに」であれば、「あなうらのはちすにきみがやどりせばなにかさらにたづねまどはむ」(能宣集・二九二・またかへしはべる)の一例を見出すことができる。この稀少な表現が、前述の『能宣集』にのみ存することは、当該歌が能宣およびその周辺で詠作された可能性を示唆するであろう。「とびかへる」という語は、雁や鶯など、鳥について用いることが多い。夏の虫としては、『大斎院前の御集』七八番の短連歌、「わかるるそらのおもひなるべし」「とびかへるほたるばかりとみえつるは」にわずかに螢の例が見出せる程度である。

三九八八(きりぎりす)

【本文】

そせい

ながためにあらせるやどかきりぎりすよながき人のもとにしもくる

【校異】 ○なかために―な^そかために(和) ○やとか―宿そ(松・羅・田)

○よなかき―よな^か・き(林)

【語釈】 ○ながために 「な(汝)」は対称代名詞。おまえ、あなたの意。奈良時代には最も一般的で、特に和歌ではもっぱら使用する。敬意は対等以下で、動植物など人間以外のものに呼びかける場合にも用いる。「ながため」の先行例としては、「磯の上に爪木折り焚き汝がためと我が潜き来し沖つ白玉」(万葉集・巻七・一二三・一二〇三)が挙げられる。なお、和学講談所旧蔵本の傍書「そ敷」は、第二句「あらせるやとか」の句末最終文字「か」に付すべきものか。○あらせる 動詞「荒らす」(土地を手入れしないまま放っておく)に存続の助動詞「り」が接続したものの。○きりぎりす 秋を代表する虫のひとつ。現在のこおろぎのこと。

『万葉集』の「蟋蟀」は、現代の新訓では「こほろぎ」と読むが、平安期の訓と見られる西本願寺本では「きりぎりす」とする。○よながき「よながし」は、夜の間の長い、夜が長く感じられるの意。「よ」は「夜」と「世」との掛詞。

【通釈】おまえのために手入れをせず放っておいた家の庭なのか。こおろぎは、年老いて夜を長く感じる人の近くにばかり寄って来るよ。

【他出】なし

【考察】

「わがやどをあきのやぶとしあらせればみだれてもなくむしのこゑかな」(秋萩集・三五) という歌からも知れるように、荒れた庭には、秋の虫が集まって鳴く。当該歌では、そのためにわざと庭の手入れをしなかったわけではないのだが、荒廃した邸で秋の夜長をもてあます老人に寄ってきたかのように、きりぎりすの鳴く声だけが近くで響く。人の訪れは絶え、やってくるのはきりぎりすだけというわびしさを、聴覚的に詠んだ歌である。

「きりぎりす」は、「影草の生ひたるやどの夕影に鳴く蟋蟀(きりぎりす)は聞けど飽かぬかも」(西本願寺本万葉集・卷十二・二六三・二五九)、「草深み蟋(きりぎりす)いたく鳴くやどに萩見に君はいつか来まさむ」(西本願寺本万葉集・卷十・二二七・二二七)、「秋風の吹きくるよひは蜚草のねごとにごゑみだれけり」(後撰集・秋上・二五七・つらゆき・題しらず) という歌からもわかるように、草の陰で鳴く。当該歌も、きりぎりすが、手入れの行き届かない庭の、生い茂った草のもとで鳴き声を響かせている状況を詠んでおり、これらの歌と共通するイメージをもつ。

「よながき人」という表現は、『新編国歌大観』を検するかぎり他例を

見ない。だが、「よながし」という語には、「なよ竹のよながきうへにはつしものおきゐて物を思ふころかな」(古今集・雑下・九九三・ふぢはらのただふさ・寛平御時にもろこしのはう官にめされて侍りける時に、東宮のさぶらひにてをのこどもさけたうべけるついでにより侍りける)、「なよ竹のよながき秋の露をおきときはに花の色もみえなん」(元輔集・一四八・小一条の右おとどの五十賀し侍りしに、屏風ゑ、たけのもとに花うゑたり)、「なよ竹のよながきつゑをつきてこそやほ万代の秋はかぞへめ」(兼盛集・七〇・又御つゑのふくろに) というように、「節(よ)」と「夜」とを掛けた「なよ竹のよながき」という類型表現を見出す。そこで当該歌にも、「よ」が掛詞である可能性を考慮し、ここでは「夜」「世」を掛けたと見た。

「きりぎりす」が「よながき人のもとにしもくる」というのは、まるできりぎりすが寄って来て鳴いているかのように、その鳴き声が近くに響いているという情景を表現しているのであろう。きりぎりすの音が近くで聞こえるという発想は、「十月蟋蟀我が牀下に入る」(詩経・豳風)に見られるものである。平安期にも、「床には嫌ふ短脚にして蜚の声聞(いそがは)しきことを」(和漢朗詠集・三三九・小野篁) といった漢詩文の例が見出せる。

結句の「……にしもくる」という表現は、平安期においては、「わがやどの花ふみしだくとりうたむのはななければやここにしもくる」(古今集・物名・四四二・ともりのり・りうたむのはな)を見出すのみで、『新編国歌大観』に拠って後世の例を検しても、用例はきわめて稀である。

三九九〇(きりぎりす)

【本文】

我がごとく物やかなしききりぎりすまくらつどへによもすがらなく

【校異】 なし

【語釈】 ○まくらつどへ 枕元に集まること。

【通釈】 私と同じようにもの悲しいのか。こおろぎは、枕元に集まって一晩中鳴いている。

【他出】 なし

【考察】

前掲の『古今六帖』三九八八番歌と同じく、「十月蟋蟀我が牀下に入る」(詩経・豳風)をもとに、秋の夜長のもの悲しさを、枕元で鳴くきりぎりすに重ねた歌である。「まくらつどへ」という語は珍しく、(惠慶百首)の「秋の夜のねざめがちなる山ざとはまくらつどへにしかのみぞなく」(惠慶集・二三四・秋)に見られる程度であるが、「きりぎりす」が多く集まって鳴いていること、また、その声がとても近くに聞こえ、静寂の中に響いていることを、この一語は効果的に表現しているよう。

「我がごとく物やかなしき」という句の先行例には、まず、『古今集』の「わがごとく物やかなしき郭公時ぞともなくよただなくらむ」(恋一・五七八・としゆきの朝臣・題しらず)という「郭公」を詠んだ歌が挙げられる。当該歌のような秋の虫を詠んだ類例としては、同じく『古今集』に、「秋の夜のおくるもしらずなくむしはわがごとく物やかなしかるらむ」(秋上・一九七・としゆきの朝臣・これさだのみこの家の歌合のうた)がある。さらに、『後撰集』の「わがごとく物やかなしききりぎりす草のやどりにこゑたえずなく」(秋上・二五八・つらゆき・題しらず)は、

当該歌と上句が全く一致する。

また、結句「よもすがらなく」も、「ゆふさればこゑふりたてきりぎりすつゆをさむみやよもすがらなく」(保明親王帯刀陣歌合・三・よしみねのゆきから・蟋蟀 左)の他、「わがごとくものおもふべしきりぎりすぬともきこえてよもすがらなく」(安法法師集・一二・きりぎりす)という歌に見出せる。いずれも「きりぎりす」を詠んだ歌であり、とくに後者は、初句・第二句も当該歌に酷似する。

そうすると、当該歌は、上句と結句の類型表現の間に、「まくらつどへ」という稀少な語を挟み込んだ構造になっていると言えよう。惠慶や安法の歌に同様の発想・表現が見えることから推すと、当該歌とこれらの歌とは、同じ文化圏で詠作されたものか。

三九九一(きりぎりす)

【本文】

そせい

秋かせのややふきしけばきりぎりすうくもよもぎのやどをかるるか
【校異】 ○うくも(和) うくも(宮) むへも(寛) ○かる、かーかるらめ(永) かる、か(宮) かるらめ(田) かるらし(黒・寛)

【語釈】 ○やや ある物事が少しずつ進むさまを表す語。徐々に。次第に。だんだん。 ○ふきしけば 「ふきしく」は、しきりに吹く、盛んに吹くの意。 ○よもぎのやど 蓬が生い茂った宿。あばら屋。 ○かるるか 「かるる」は「離る」で、離れていく意。「枯る」を掛ける。
【通釈】 秋風がだんだんとしきりに吹くようになると、こおろぎは、つらく思いながらも、枯れた蓬の宿を離れていくのか。

【他出】なし

【考察】

「秋風やよもぎのやどに吹きぬらんこゑなつかしく鳴くきりぎりす」(古今六帖・第六・三九五八・よもぎ) という歌からも知れるように、秋風が吹くようになると、蓬の宿できりぎりすが鳴く。そして、秋が深まっていくと、蓬は枯れ、きりぎりすの声は、だんだん小さくなって、やがて消えていく。さては、きりぎりすはみなここを去っていったのかと、あばら屋にひとり残された晩秋の寂しさを詠んだ歌である。

当該歌には、前掲『古今六帖』三九五八番歌の後日談の趣がある。詳しくは、『《研究ノート》』『古今和歌六帖』出典未詳歌注積稿―第六帖(11) 酢漿草く苔―(『社会科学』(同志社大学人文科学研究所) 第四十五巻第一・二号、二〇一五年八月) を併せて参照されたい。

初句・第二句の「秋かぜのややふきしけば」という表現は、全く同じ例が、「あき風のややふきしけばのをさむみわびしき声に松虫ぞ鳴く」(後撰集・秋上・二六一・つらゆき・題しらず) に見出される。当該歌と同様に、秋の虫の声を詠んだ歌であり、後撰集時代の類型表現と捉え得るであろう。

また、「きりぎりす」と「よもぎ」との組み合わせは、先の『古今六帖』三九五八番の他、同時代の歌としては、「なげやなげよもぎがそまのきりぎりすくれ行くあきはげにぞかなしき」(好忠集・二四二・八月をはり) も挙げられるが、『新編国歌大観』を検する限り、これらはごく初期の用例と見られる。

三九九二(まつむし)

【本文】

つらゆき三首

秋ののつゆにぬれつつたれくとか人まつむしのこころ鳴くらん
【校異】 ○つらゆき三首―貫之(林) ○ぬれつ、たれく―ぬれたる人と
か(宮)

【語釈】 ○秋 「秋」と「飽き」との掛詞。 ○つゆにぬれつつ 「つゆ」は涙の比喩。泣いているさまを暗示する。「風寒美 鳴秋虫之 涙許曾草葉之上丹 露緒置良咩」(新撰万葉集・三五五)。 ○こころ 程度の
はなはだしいさま。たいそう。 ○人まつむし 松虫は、秋を代表する
虫の一つ。「(人) 待つ」と「松(虫)」とを掛ける。

【通釈】 秋の野の露に濡れながら、いったい誰が来るといので、人を待つ松虫は、激しく鳴いているのだろうか。(恋人に飽きられて泣きながら、それでも誰が通って来るといので待っているのだろうか。)

【他出】なし

【考察】

人を「待つ」という名の「松虫」が、訪れるあてのない人を待って鳴くのを哀れんだ歌である。松虫には、「誰そ彼と我をな問ひそ九月の露に濡れつつ君待つ我を」(万葉集・巻十・二二四四・二二四〇) といった歌に見られる、恋人の訪れを待つ女性のイメージが重なる。

「人まつむし」の勅撰集における初出は『古今集』である。「あきののに人松虫のこゑすなり我かとゆきていざとぶらはむ」(秋上・二〇二・よみ人しらず・題しらず) という歌があるが、その後は八代集においても、「契りけん程や過ぎぬる秋ののに人松虫の声のたえせぬ」(拾遺集・秋・一八一・よみ人しらず・題しらず)、「とふ人も今はあらしの

山かぜに人松虫のこぞぞかなしき」(拾遺集・秋・二〇五・よみ人しらず・題しらず)の二首を見出すのみである。その他の歌集でも、「ゆふされば人まつ虫のなくなへにひとりある身ぞ恋ひまさりける」(貫之集・六四五)、「ながきよにたれたのめけむをみなへしひとまつむしのえだごとになく」(亭子院女郎花合・一二・右)など、用例数はそれほど多くはない。掛詞としての用法に特化された歌語だったために、表現のバリエーションを生み出しにくかったであろう。

「まつむし」と「つゆ」との組み合わせは、「語釈」に挙げた『新撰万葉集』三五五番の他、「白露を草葉におきて秋のよを声もすがらにあくるまつむし」(海人手古良集・二四・秋)が挙げられる。秋の景物として、松虫と露とは自然な組み合わせだが、松虫に「待つ」を掛け、露を涙の比喩と捉えることにより、秋の情景の背後に、待つ女のイメージが揺曳する。

「こら鳴くらん」の勅撰集における用例は、『古今集』に二例、『後撰集』に一例存する。このうち、「まつむし」について詠んだ歌は、「もみぢばのちりてつもれるわがやどに誰を松虫こらなくらむ」(古今集・秋上・二〇三・よみ人しらず・題しらず)、「秋ののにきやどる人もおもほえずたれを松虫こらなくらん」(後撰集・秋上・二六〇・つらゆき・題しらず)の二首である。これらの歌の系譜に、当該歌も位置付けられるであろう。

なお、これらの『古今集』『後撰集』の歌は、いずれも「誰を松虫」という表現をとっており、ここにもまた類型表現を見出す。「誰(を)松虫」の勅撰集における用例は、『古今集』『後撰集』に限られており、当該歌の「人まつむし」の例と同じく、用例数は少ないながらも、平安

中期までに詠まれた歌と見られる点に注意しておきたい。

三九九六(まつむし)

【本文】

たきつせの中に玉つむしらなみはながるるみ(こ)を(こ)を(こ)にやぬくらん

【校異】なし

【語釈】〇たきつせ 激しい流れの川。滝の急流。〇玉つむしらなみ

は「玉つむ」は、「玉集む」で、白玉(真珠)を集める意。「玉」は、水の泡の見立て。「まつむし」を隠す。〇みを 水緒の意。漣。水脈。水の流れる筋。〇をにやぬくらん 「をにぬく」は、「緒に抜く」で、糸で貫き留める意。

【通釈】激流の中に、真珠を集めている白波は、水流の筋を糸として、貫き留めているのだろうか。

【他出】『拾遺和歌集』巻第七物名、三六九番

松むし

【考察】 たきつせのなかにたまつむしらなみは流るる水ををにぞぬきける

第二句から第三句にかけて、「玉つむしらなみ」に「まつむし」を隠す物名の歌である。『拾遺集』では、第四句を「流るる水を」とする。『古今集』の物名歌、「浪のうつせみればたまぞみだれけるひろはばそでにかなからむや」(四二四・在原しげはる・うつせみ)を念頭に置いた作か。「たきつせ」と「玉」との組み合わせは、「滝つ瀬のものにぞ有りける白玉はくるたびごとにみぬ時ぞなき」(貫之集・四六・延長六年中宮の御屏風のうた四首、右近権中将うけ給はりて)、「たきつせもうき事あれ

やわが袖の涙につつおつる白玉」(貫之集・三〇九・延喜の末よりこなた延長七年よりあなた、うちうちの仰にてたてまつれる御屏風の歌廿七首/冬) というように、貫之の屏風歌に見られ、屏風の図柄としても定着していたと推察される。本来は、「たきつせに誰白玉をみだりけんひろふとせしに袖はひちにき」(後撰集・雑三・一二三五・人の家にまかりたりけるに、やり水にたきいとおもしろかりければ、かへりてつかはしける) というように、玉は乱れ散るものと見做されるようだが、当該歌では、激流の中に水が泡立っている所を見出し、その理由を、水脈で貫き留めているのかと推察した。

「玉」を「をにぬく」という表現は、「たまとのみつゆのみゆるはささがにのいとををにしてぬけばなりけり」(東院前裁合・四・左 つゆ)、「哀てふことををにしてぬく玉はあはで年ふる涙なりけり」(貫之集・六二九) といった古今集時代の用例がある。

また、「ながるるみを」の例としては、『万葉集』に「泊瀬川流るる水脈の瀬を早みるで越す波の音の清けく」(巻七・二二・二一〇八) がある。当該歌と同様、激流の水脈を詠んでいるが、平安期に入ると、「せきとむるなみだいづみにたえせずはながるるみをぞとどめざりける」(伊勢集・二九三・人のながされけるとき) (伊勢集・三七六・伊づに人のながされたるに・第三句「つきせねば」)、「なみだがはながるるみをとしらねばやそでばかりをばきみがとふらむ」(相模集・九四・返し) のように、「みを」に「水脈」と「身を」とを掛ける用例が目立ち、当該歌とは一線を画す。

四〇〇一(すずむし)

【本文】

かりにきて野辺にぞまどふすずむしの声はさやけきしるべなれども

【校異】なし

【語釈】〇かりにきて「かり」は「狩り」と「仮り」とを掛ける。〇

すずむしの声 鷹狩りの際、鷹の行方を知る手掛かりとして、鷹の尾羽に付けた鈴の音を重ねる。〇さやけき「さやけし」は、声はつきりとしていて快い響きである意。

【通釈】仮初めに鷹狩りにやって来た野辺では、すっかり道に迷ってしまった。鈴虫の声が、(鷹狩りの鷹に付けた鈴の音のように) はっきりとした道標なのだ。

【他出】なし

【考察】

「かり」(狩り/仮り) という常套の掛詞を用いながら、鈴虫の声を鷹狩りの鷹の鈴の音に重ねたところに趣向のある歌であろう。野辺で道に迷う原因は、たとえば、「あきざりにゆくへやまどふをみなへしはかなくのべにひとりほのめく」(亭子院女郎花合・三三二・すずぐ) のように、霧のため視界がきかないことが詠まれることもあるが、当該歌では、鈴虫の音を、鷹狩りの鷹の居場所を知るたよりである鈴の音と取り成して、それでも道に迷ってしまったことを聴覚的に表している。『古今六帖』には、「かりにとて野べにぞきつるすず虫の声はさやけきしるべなりけり」(第二・二二〇五・つらゆき・こたかがり) という酷似した歌があり、異伝歌と見られるが、この歌では、鈴虫の声がきちんと道標になっており、歌の内容が当該歌とは逆になっている。

鷹と鈴との結び付きに着目して詠んだ歌としては、「はしたかのす
 ずろあるきにあらばこそかりともひとのおもひなされぬ」(清正集・
 二一・返し)、「かりにてもすゑじとぞおもふはしたかのすずろなるなを
 たちもこそすれ」(古今六帖・第二・一一八〇・こたか)、「空にたつと
 りだにみえぬ雪もよにすずろにたかをすゑてけるかな」(和泉式部集・
 一九七・人の屏風の歌よまするに／うみづらにたかすゑたるたび人、ゆ
 き降りたる)など、鷹と「すずろ(あるき／なり)」という語を詠み込
 んだ歌がある。また、「なにはいへどたかにもつけぬすずかがはせぜの
 おとはぞさやけかりける」(忠岑集・七八・いせのみちのすずかがは)、「か
 ずならぬみははしたかのすずか山とはぬになにのおとをかはせん」(小
 馬命婦集・三九・かへし)といった、地名「鈴鹿川／山」を詠む例も見
 出せる。技巧に拠った用法が目立つ。

なお、鷹狩りと鈴虫とを詠み込んだ歌には、「みかりする人やことな
 るはしたかのとがへるのべのすずむしのこゑ」(長能集・一七八・むし)
 がある。

附記

本稿は、同志社大学文化情報学部における二〇二二年度および
 二〇一四年度春学期の授業「文献講読」において採り上げた内容の一部
 である。受講生のうち、近藤祐輔が三九九二番歌についてレポートを執
 筆し、その他の歌の原稿の執筆および加筆修正を、「伝統文化形成に関
 する総合データベースの構築と平安朝文学の伝承と受容に関する研究」

(同志社大学人文科学研究第18期研究会第17研究、および科学研究費
 助成事業基盤研究(C)課題番号25330403、いずれも平成25
 年度)の一環として行った。

用例収集に際し、『新編国歌大観』CD-ROM版Ver.2とともに、竹田
 正幸氏(九州大学大学院システム情報科学研究院)作成の文字列解析器
 “eCSA Ver.200”を使用した。

最後に、資料を御提供くださった宮内庁書陵部・島原図書館島原松平
 文庫・国文学研究資料館に厚く御礼申し上げます。

『古今和歌六帖』別出歌一覧―第六帖、3972～4001番―

凡例

- 1、『古今和歌六帖』本文と歌番号は、『新編国歌大観』に拠る。作者名・詞書・
 左注がある場合は、当該歌のあとに()を付して記す。
- 2、調査対象として、『新編国歌大観』から以下の歌集を選択する。『古今和歌六
 帖』の成立は十世紀後半と想定されるが、出典としては、やや後世の作品ま
 で調査範囲を設定している。

第一巻 1古今和歌集～4後拾遺和歌集

第二巻 1万葉集～6和漢朗詠集

第三巻 1人丸集～81赤染衛門集

第五巻 1民部卿家歌合～61源大納言家歌合 長久二年、253紀師匠曲水宴和
 歌～269九品和歌、281歌経標式(真本)～285新撰髓脳 新撰和歌髓脳、

347古事記、353風土記、371日本霊異記、372三宝絵、389土左日記、393和泉式部日記、414竹取物語、420落窪物語

第六卷 2秋萩集、5麗花集
第七卷 1奈良帝御集、36肥後集

3、別出歌は、『新編国歌大観』の巻数・通し番号を付した歌集名と歌番号で示す。

〔例〕 3-19貫之355 『新編国歌大観』第三卷19番目の『貫之集』355番歌

4、別出本文に異なる場合は、句ごとに「」を付して記す。なお、漢字と仮名など、表記上の相違は指摘せず、有意の異なるのみに限る。

5、『古今和歌六帖』所収歌には、別の歌集の歌との間で、さまざまな類似性を有するものがある。そのまま別出歌とは認めにくいものの、まったく無関係に作られたとも考えにくい場合には、△参考▽と記し、波線を付す。

6、特定の別出歌が指摘できない場合や、十一世紀以降の作品にしか別出が見出せない場合は、いわゆる出典未詳歌として△未詳▽と記し、傍線を付す。

別出歌一覧

せみ

3972 秋はやみせみの鳴きつとなげかれぬつれなき人のすむ山とほみ(そせい)

〔未詳〕

3973 せみのこゑ聞けばかなしな夏ころもうすくや人のならんとすらん(ともりの)

1-1古今715 「ならむと思へば」、2-2新撰万43 「ならむとおもへば」、

2-3新撰和153 「ならんと思へば」、3-11友則34 「ならんとおもへば」、

5-4寛平后41 「ならむと思へば」

3974 いしばしる滝もどろに鳴くせみのこゑをしきけば宮こおもほゆ

2-1万葉3639 「いはばしる」「みやこしおもほゆ」

3975 さくはなはとしにかへねど空蟬のよのためしにもちるにざりける(伊勢)

3-15伊勢集318 「さくら花」「よをためしにて」

3976 今も猶わかれてぞ人のうらめしきかるさなかの中になかれて

〔未詳〕

3977 うつせみのむなしきからなるまでにわすれんとおもふ我ならなくに

1-2後撰896 「なるまでも」、3-39深養父34 「なるまでも」

3978 あはれてふ人はなくともうつせみのからなるまでなかとぞおもふ

3-13忠岑23、7-6忠岑13

3979 たもとよりはなれて玉をつつまめやこれなんそれとうつせみむかし

1-1古今425、3-13忠岑5、7-6忠岑125

3980 なみのうつせみれば玉ぞみだれけるひろはば袖にはかなからんや

1-1古今424、3-13忠岑4 「はかなからめや」

夏むし

3981 よひのまもはかなくみゆる夏虫にまどひまされるこひにもあるかな

1-1古今561 「こひもするかな」、2-2新撰万49 「こひもするかな」、3

3982 1-11友則33 「恋もするかな」、5-4寛平后45 「宵の間は」「恋もするかな」

夏むしをなにかいひけん心から我もおもひにもえぬべらなり(みつね)

1-1古今600、7-5躬恒317

3983 まさりては我ぞもえける夏虫の火にかかるとてなどもどきけん(ふかやぶ)

3-12躬恒442 「なつむしを」「ひにかかりとて」「なにもどきけむ」、7

1-5躬恒96 「夏むしは」「火にかかりとて」「なにもどきけん」

3984 夏虫の身をいたづらになすこともひとつおもひによりてなりけり

1-1 古今 544

もゆる火に思ひ入りにし夏むしはなにしかさらにとびかへるべき

〈未詳〉

3986 夏虫のしるしるまどふおもひをばこりぬかなしとたれかみざらん(伊勢)

1-2 後撰 968、7-2 業平 88 「いかがみざらむ」、3-15 伊勢集 124 「こりぬあはれと」

さりぎりす

3987 さりぎりすいたくななきそ秋の夜のながきおもひは我ぞまされる

1-1 古今 196、2-6 和漢朗 333

ながためにあらせるやどかさりぎりすよながき人のもとにしもくる

(そせい)

〈未詳〉

3989 秋風のふきつるよひはさりぎりす草むらごことにこゑみだりけり(つらゆき)

1-2 後撰 257 「吹きくるよひは」「草のねごと」に「こゑみだれけり」、5
1-3 是貞合 42 「ふきくるよひは」「草のねごと」に「こゑみだれけり」

3990 我がごとく物やかなしきさりぎりすまくらつどへによもすがらなく

〈未詳〉

秋かぜのややふきしけばさりぎりすうくもよもぎのやどをかるるか

(そせい)

〈未詳〉

まつむし

3992 秋ののつゆにぬれつつたれくとか人まつむしのこころ鳴くらん

(つらゆき三首)

〈未詳〉

こむといひしほどもすぎにし秋ののにひとまつ虫のこゑのかなしき

1-2 後撰 259 「ほどやすぎぬる」「誰松虫ぞ」「こゑのかなしき」

3994 秋ののにきやどる人もおもほえず誰を松虫こころなくらん

1-2 後撰 260

3995 夕されば人まつむしのなくなへにひとりある身ぞこひまさりける

3-19 貫之 645

3996 たきつせの中に玉つむしらなみはながるるみををにやぬくらん

〈未詳〉

1-3 拾遺集 369 「流るる水を」「をにぞぬきける」

3997 秋ののに我まつ虫の鳴くといはばをらでねながら花はみてまし(五条のきさき)

3-15 伊勢集 149

君しのぶくさにやつるる古郷は松むしの音ぞかなしかりける

1-1 古今 200

すずむし

3999 たまさかにけふあひみればすずむしはむつまししながらこゑぞきこゆる

3-23 忠見 145 「けふあひみれど」「むかしならしし」

4000 人のいもかるときくまでをみなへしもとことになくすず虫のこゑ

7-5 躬恒 140 「人のこも」「かるといふまで」

4001 かりにきて野辺にぞまどふすずむしの声はさやけきしるべなれども

〈未詳〉